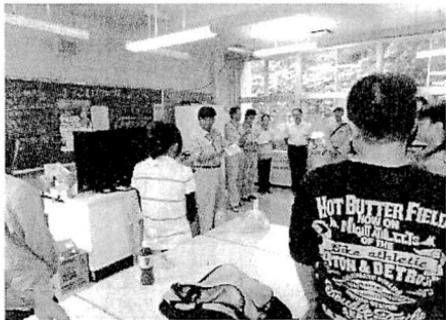


# 復旧・復興まで見守る

## 東洋学園大学

東洋学園大学（東京都文京区）は8月22～24日の3日間、岩手県の沿岸部に位置する下閉伊郡山田町においてポ



朝の点呼。当日の作業内容が指示される

ランティア活動を行った。参加者は、引率教員1人、人文学部の学生7人の計8人だ。同大と山田町は特別な関係にあつたわけではない。発起人であり、学生を引率した人文学部の柴鉄也教授は「他のボランティアの方々の活動状況から判断しました。東北北部、それも交通の不便な沿岸部ほど支援の手が入っていませんでした。そこで、人手不足感が強い沿岸地域を選びました」と振り返る。

盛岡駅までは新幹線が利用できたが、そこからは路線バスを利用。沿岸部に宿舎を求めるのは難しいため、盛岡駅

と宮古駅の途中にある宮古高校川井分校跡の「かわいキャンプ」に拠点を構えたのだという。その場所から、盛岡市社会福祉協議会の指示のもと、山田町に向かった。

「活動内容は救援物資の仕分けが中心。体育館内に山積みされた全国からの衣服に圧倒されました」

さらに、海からかなり離れた場所に流されたボートや救命胴衣等の回収なども行ったという。

人文学部人間科学科3年生の茂木緑さんは、「隣接する宮古市にも立ち寄ったのですが、8月時点でも電柱がポツキリ折れたまま放置され、ガードレールは飴のように曲がったままでした。津波の恐ろしさをまざまざと見せつけられました」と証言する。一方、同学部同学科3年生

の井上雄太さんは、「普段、心理学を学んでいるため、少しでもそうしたサポートをしたいと考えていました。しかし、それ以前に必要とされるサポートがあります。また、住民の皆さんと接するときには、何気ない発言がさらに悲しませるきっかけにならないように留意しました」と語る。

東洋学園大のボランティア活動は今限りでなく、11月以降も予定されている。茂木さんと井上さんももちろん、再訪問する決意だ。二人が学んでいるのは心理学だが、「そうした知識も活かせられたら」と、異口同音に抱負を語った。

同大では現地のさらなる復旧・復興を目指して、少なくとも3年以上という長期プランでボランティア活動に取り組んでいくという。